



# 元ネタを知ってパロディの価値がある『新釈走れメロス』三木麻歩加

今回は国語科の三木先生に書いていただきました。

およそ中毒というものは、本人も周囲も知らない間に陥っているもので、気がついた時にはもう遅いのです。そこから抜け出すことは大変難しく、本人の強い意志と周囲のサポートが必要です。活字中毒も例外ではありません。さらに悪いことに、活字中毒については、本人も周囲も、抜けださなければならないという危機感が皆無です。いつでも、どこでも、文字を追い求めて視線はさまよい、いま読んでいる本、その次読む本、移動中に読む本、何冊も用意しておかないと落ち着きません。国語科の三木先生は活字中毒の匂いがします。司書大藤と同類です。そういうと三木先生は気を悪くされるかも知れませんが、何も喋らなくてもそういった気配は伝わってくるものです。

## 文章を読む

国語科 三木麻歩加

私の高校時代を振り返ると、「読書の時間」は比較的小なかったように思う。中学まではほぼ毎日小説を読み、読書のための時間を作っていたのだが、高校に入学すると勉強や部活動に追われ、少しずつその時間は減ってしまった。でも、決してゼロになったわけではない。勉強の合間やお風呂、はてはトイレにまで持ち込んで、私の読書は継続されていたのである。だから、今日に至るまで明確な「読書のためのまとまった時間」は減ったが、「本を読める時間」は無くなったことはない。今でも隙間を見つけてはひたすら文章を読む毎日である。

そんな私であるが、今回おすすめしたい本をあげてほしいと言われて、すぐ本は浮かばなかった。というのも、私は文章を読むという行為が好きなのだ。だから基本的にどんな本でも読む。それが本の形態を成していれば、なんであれとりあえず読む。携帯小説から評論まで、好みが合わなかったり読みにくさを感じたりして顔をしかめることがあっても、時間があるなら読む。そんな人間である。そのため、なかなかすすめる本が浮かばなかったのだが、ここはひとつ、自分が好きな娯楽小説で、なお且つ文学作品を下敷きにした近代作家の作品を紹介しようと思う。



一冊目は森見登美彦作

『新釈走れメロス』である。京都が舞台の短編小説が五作入っているのだが、そのすべてが有名作品をパロディとなっている。例えば中島敦の『山月記』は、鞍馬山が舞台になり、虎ではなく鞍馬

山と縁深い生き物に変身してしまう話になっている。また太宰治の『走れメロス』は、京都大学が舞台に変更され物語が展開していく。主人公は「芽野史郎（めのしろう）」。「芽野史郎は激怒した。」から始まるドタバタ騒動を、描く。

この本は、読んでみるとそれぞれの短編小説に複雑な関わり合いを感じる点が魅力の一つである。関わり合いを匂わせることで、登場人物たちの住む「京都」が読者の中で一つの世界になる。まさに見事としか言えない。そして、もう一つの魅力的は森見氏の言葉の使い方と原作を感じさせる展開である。原作を知っていればいるほど、この作品の面白さは増幅されていくように思う。この面白さを感じるためにも、一度もとの作品を読んだ後で読んでみてほしい。きっと、より楽しい時間を過ごせるだろう。(また、この作者の『有頂天家族』も面白い。こちらも京都が舞台。主人公は下鴨神社に暮らす狸の家族の三男坊である。是非読んでみてほしい。)



二冊目は、桜庭一樹作

『伏一匱作・里見八犬伝』である。これは滝沢馬琴作『南総里見八犬伝』を下敷きにした小説だ。時は江戸時代、伏と呼ばれる若者たちが起こす凶悪事件を重く見て、幕府はその首に懸賞金をかけた。物語は獵師の少女、浜路が兄を頼ってそんな江戸へとやってくるころから始まる。「伏」にまつわる物語や、浜路がであった一人の伏、信乃の存在が物語を展開していく構成のライトノベルである。すらすらと読ませる軽さがある一方、多くの対比をふくんだ関係設定はなかなか面白い。実はこの作品は映像化もされているのだが、そっちの方とこの小説は構成が違っている。その違いを楽しむこともできるし、もちろん馬琴の『南総里見八犬伝』と読み比べてみるのもまた違った楽しさがある。滝沢馬琴作『南総里見八犬伝』は長編伝奇小説として有名であり、今読んでも変わらない面白さを持った作品だ。古典作品であるが、現代訳版はいくつかでているので読んでみてほしいと思う。



作品を比べていくと、その違いから作者の個性や主張がみえてくる。同一作品からの派生作品をいくつも追っていくと、実に多様な見方や展開、表現があるんだと驚かされる。それがこのような原作のある作品の楽しさであると私は思っている。最近では他にも『源氏物語』や『今昔物語』、『四谷怪談』など、実に多くの文学作品が下敷きにされ、新たな現代小説として出版されている。是非それらを手にとり楽しんでみてほしい。そして、その小説自体を楽しんだあとは原作のほうに目を向けてさらに読書を楽しんでほしいと思う。